

～つなげ広げたい岩手が誇る芸術文化の活動と歴史～

令和6年度地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅠ】採択課題

課題名：岩手県の文化芸術・体験イベントにおける次世代育成を見据えた実験的な場づくりに関する調査研究—文化芸術のジャンルと世代を結ぶ岩手型ムーブメント形成—

研究代表者：総合政策学部 倉原宗孝

課題提案者：岩手県文化スポーツ部文化振興課

研究メンバー：工藤一幸、鈴木まり子（岩手県）

技術キーワード：文化芸術、体験、岩手県芸術文化協会

▼研究の概要（背景・目標）

岩手県においては、県民の文化芸術に親しむ機会の充実を図るため、文化芸術の祭典「岩手芸術祭」を開催（令和6年度で第77回）しており、毎年10月～2月頃にかけて、県内各地で文化芸術に関する舞台部門、美術部門、文芸部門の多種多彩なイベントを実施している。各分野の協力と熱意のもと長年にわたるこの取組は、県民一人ひとりの文化的資質の向上、また文化芸術の各ジャンルの水準向上に大きく貢献している。一方で文化芸術に関わる個々のジャンルにおいては、関わり方がそれぞれの価値観に大きく左右され、対象や志向がジャンル内に閉じてしまう傾向もある。その中で、新しい文化芸術の意義と形を作り上げていく時期がある。また芸術祭の関連事業として、次世代育成に向け気軽に文化芸術に親しみ発表する機会を提供する「体験イベント」を実施しており、次世代への継承が期待される。ここでは、本県の文化芸術活動の現状把握のもと、ジャンル間交流や世代継承も含めた今後の文化芸術振興のための方途を探る。

▼歴史ある岩手の芸術活動

岩手県では昭和22年から「岩手芸術祭」が途絶えることなく開催されており、令和6年度で77回目となる。明治期の岩手県の文化芸術には、雑誌類の刊行、関連団体の発足が多い。大正時代もこの動きは続くが、この時期本格的な洋楽が始まった。その後、第二次世界大戦では文化芸術が戦争への士気高揚に、また戦後は復興のモチベーションとしても扱われる面も。戦後の昭和には今日にも通じる施設が開館している。平成20年には岩手県文化芸術振興基本条例が交付、2014年には三陸国際芸術祭が生まれる。東日本大震災を経験してきた私達にとって文化芸術は復興の力であることも実感する。



▼芸術は街に繰り出す-肴町体験イベント-

芸術体験フェスタの一コマは盛岡市肴町アーケードでも展開された（令和6年9月28、29日）。様々な芸術を身近な生活空間の中で触れ合うことが各自の暮らしの豊かさと同時にマチを元気にしている。音楽、チンドン屋、書道、水墨画、機織り、けん玉、etcの様々なジャンル、またアール・ブリュットなど多様な心身の状態から生み出す芸術、それらが織りなす場と体験には、芸術文化から開く新しい時代の社会づくりが見える。こうした場の展開が県内の各地で生まれていることが芸術文化への岩手県の特徴と魅力だろう。



▼長い歴史と愛着ある芸術体験フェスタ

長い歴史を持つ岩手芸術祭の令和6年度は釜石・大槌の開催（令和7年1月18日～19日）。多世代・多ジャンルによる晴れやかな舞台公演（合唱、バレエ、舞踏、民謡、協働芸能、ダンス、演奏、etc）、気軽に触れる体験イベント（俳句、水墨画、お茶、生け花、太鼓、芸能、etc）と県内の芸術文化が総集する濃密なひと時となった。来場者も早くから会場を待つなど高い関心度が非常に高い。各ジャンルの技術も高く、こうした取り組みが一世紀近い長きにわたり紡がれてる事は岩手の財産だろう。



▼おわりに（まとめ・今後の展開）

岩手県における芸術文化に対する認識・技術の高さと多様性が改めて確認された。ここには近代以降の本県における様々なジャンルの人々の貢献があり、その長きにわたる取り組みの意味と成果は岩手県の多財産であり、全国に誇れるものの一つである。一方で、その維持・発展に向けては、財政面の課題と共に次世代への継承がある。研究の一コマとして行ったアンケート（その一部を下表）では、興味はあるが時間や場所がなく関わりづらいといった面も見られた。このことに対して身近な気軽に触れ合える仕掛け、場づくりが求められるが、その兆しは今回の研究調査のなかでも見られ今後がさらに期待される。【謝辞】調査にご協力頂いた多くの方々、また（一社）岩手県芸術文化協会並びに藤沢美紀さん(R6卒業生)に深く感謝する。

芸術文化の興味	今後続けたいものがあつたか	合計
興味がある	あつた	49
興味がある	なかつた	5
どちらかというと興味がある	無回答	2
合計		88